

各団体等からの聞取りの概要

障がい者計画の見直し及び障がい福祉計画・障がい児福祉計画を作成するにあたり、計画の内容、また今後の本市の障がい福祉施策の参考とするため、当事者団体などから現状や福祉サービスへのニーズについて聞取りを行った。

当事者団体などから出された意見等の概要は以下のとおり。

西部ろうあ仲間サロン会 R2.9.28 13:00～14:00

○現状について

サロン会には専任の職員がいないため、他の仕事を持ちながらの活動で、自由にならない部分がある。

○市の防災行政について

防災無線で放送した内容をFAXで当事者宅へ発信するとのことだが、文字が多いと読みにくく、すぐには理解ができない者もいる。Eメールも同様である。例えばイラストや絵で示してあれば理解しやすいと思う。現状でも、市から届く手紙・文書の理解が難しく、サロン会に持参して手話通訳者に読んでもらっている。

○要望について

現行のサービスでは利用できない買い物などへの同行や、好きなお店や場所に車で連れて行ってもらうなどができればと思う。そうした移動支援も手話通訳と一体として制度化してもらえるとありがたい。それも、障がい者にとっての豊かな生活に向けた施策ではないだろうか。

利用者が集まることのできる拠点が欲しい。

米子市身体障害者福祉協会 R2.9.28 14:30～15:30

○団体について

300名程度が在籍。国、県に上部団体あり。新規会員の確保に苦慮しており、会員数は年々減少している。

○現状・会の存続について

会員数の減少などにより、このままの状況が続けば将来団体がどうなるのか、見込みが立たない。

○高齢化について

会員数の減少もだが、会員の高齢化が極めて大きな問題である。今現在も、将来も、移動手段をどう確保するのかに最も頭を悩ませている。

○困りごと、要望について

移動手段が確保できない人が多い。色々なところへ訪問したり参加したいと思うが難しい。

他自治体のように、デマンドバスのような仕組みが米子市でもあると助かる。

淀江家族会 R2.9.29 10:30~11:30

○団体について

ここ数年間、会としての活動はほぼ行っていない。

○会の存続について

会員もいないので、実質的に15年くらい前から会としては消滅している状態。

会を復活させるとか、新たな形で再出発する、というのは現段階では難しい。横のつながりがない。

鳥取県視覚障害者福祉協会 R2.10.5 10:00~11:20

○防災・災害時の対応について

災害時の対応について不安がある。何年か前に要援護者登録をしたが、隣近所の環境の変化もあり、登録時と色々状況が変わっている。

ハザードマップは我々には見ることができず、どう理解すればいいのか分からない。

防災無線が聞き取りにくい。防災ラジオとか、無線の端末を自宅に設置してもらいたい。

○要望・困りごとについて

公的文書の点字版作成は、少しずつかもしれないが、お願いしたいと思う。市で点字を読み書きできる人を雇用すれば、公文書の点字版作成が容易になるのではないか。

世の中のデジタル化、IT化が加速していく気がするが、我々にはメリット少ない。世の中から取り残されているような気がしてしまう。

地域生活支援事業の意思疎通支援事業での代読・代筆については、事業化ができていないのでぜひ検討してもらいたい。

同行援護に関しては、サービスを提供する事業所が減っていることや、新型コロナウイルス感染拡大も関係しているのか、利用者も減っている印象。当協会員でない視覚障がい者への同行援護の認知度が低いかもしれない。

提供する側（事業所）の視点から考えると、単独の事業では採算性が厳しい。

見えない、見えにくい視覚障がい者への援助は、聴覚障がい者への手話などの援助に比べて広まっていないと感じる。

歩行訓練士の人数が少ない。資格取得には時間も費用もかかるので援助があればと思う。

米子市肢体不自由児者父母の会連合会 R2.10.8 10:00~11:20

○団体・現状について

現在約25家族が会員。皆生養護学校に通っていた家庭の会員がほとんど。国・県・市町村レベルでの組織もあり、つながりもある。

○会の存続について

新しい加入者の入会が少なく、過去の経過とか、昔の事情を知らない。今後この状況が続けば会の存続も危うい。

○地域とのつながりについて

近所の人たちとつながりがないと、人知れず亡くなることもあり得る。

○高齢化について

当事者も親世代も高齢化は深刻。

○防災について

突発的な災害発生時に、どのような対応ができるのか不安。災害時の要支援者登録を活かしてほしい。

災害以外でも、突然の事情でショートステイを希望しても空きがない。障がい当事者がある程度施設やヘルパーに慣れていないと利用が難しい。

ヘルパーについては、定期的な利用は可能だが、急な利用は人員不足なのかほとんど受け入れてもらえない。

○困りごと・要望について

移動支援などのサービスは、利用できており、生活に役立てさせてもらっている。

他の自治体と比較すると、米子市は障がい者に対する施策にとても力を入れてくれて

いると思う。

地区ごとにどのような障がい者がどこの家に住んでいるか、市として情報把握すべきではないか。高齢者は地域包括支援センターが見守っているが、障がい者にそのような制度はない。

一人暮らしをして自立したい、させたいと思っても、住まいの問題はとても難しい。親が必死に探さないと見つからない。

障がいのある人だけの話ではなく、色々な違いがあっても受け入れてもらえて、みんなが集えるような施設とか、制度などがあればいいと思う。ただし、それは行政主導では難しいかもしれない。民間の方がやりやすいのではないだろうか。

精神障害者家族会すけっと R2.10.9 10:00~11:30

○団体について

県西部地区、米子市、境港市の20家族くらいが所属。当事者の親は高齢化しており、定期的な会に集まるのは4~5人。国・県に上部団体あり、

○困りごと・要望について

親が亡くなった後の不安は大きい。高齢化は確実に自分たちの周りにも影響し始めている。

精神障がい者への対応は、身体や知的と比べて遅れていると感じている。今はかなり改善されたが、以前は精神障がいは医療の対象で、福祉の面から支援されることはなかった。

医療機関が治療だけでなく、相談窓口の案内や、家族会の紹介なども患者に伝えてくれたら、地域移行はもっとスムーズに進むのではないか。

当事者が地域移行しても、支援がなければ警察沙汰になることもある。リスクある人の情報を、事前に共有することはできないだろうか。

当事者にとって最終的な目標は自立すること。一人で暮らし、働く。そのためのステップであるグループホームが少なく、そこで働く人も少ないため、利用できる空きがなく、苦勞している。

行政には、調整役としての役割を期待したい。

米子市には、医療機関はたくさんあるが、精神障がいの当事者にとってどこが適切なかの選択の部分でアドバイスもらえると助かる。医療・行政・施設・家族の連携がある

と、その点が上手くいくと思う。そんなネットワークを構築してほしい。

精神障がいとは、特別な話ではなく突然問題が起こるので、本人も家族もどうしたらいいかわからない状況となることもある。また、他人から（外から）見ても分かりにくく、気付かれにくい面もある。学校での教育など必要ではないだろうか。

発達障がい児親の会 CHERRY R2.10.9 13:00~14:30

○団体について

NPO法人で創設9年目。会員は約50名。2歳～高校3年生までの当事者の家族で構成。現役の親世代が会員で、組織としては緩く繋がっている雰囲気。定例会などにしても、必ず出席を求める訳ではない。会員によっては特定の行事にしか参加しない家庭もあるが、それでも構わない。

○要望・困りごと

検診では指摘されなくても親として違和感を覚え、医療機関を受診して初めて支援が必要なが分かるような場合もある。不安な時に相談できる機関、窓口の情報をもう少しPRすべき。

相談支援事業所一覧が、住所や連絡先だけの情報になっていて、具体的にどこがどんなことに力を入れているのか分からない。

保育園、幼稚園から小学校入学が一つの大きな関門。だが、それがゴールになってしまっただけでは意味がない。そこを上手くつないでいくことが、行政の役割ではないだろうか。

就学時に、学校、相談員、保護者で移行支援会議を行う場合があるが、誰が主導するのか不明確。小学校から中学校への情報共有も重要。一貫した取組が必要。

学校や担任によって、子ども、保護者への対応にかなりの差がある。担任の先生だけで抱えてしまうのではなく、チーム（教頭、教務主任、支援担当教員など）として取り組んでほしい。

発達障がいの子どもは、小学校や中学校で不登校となるケースも少なくない。その時に、親対学校という構図になるのは問題だと思う。

市米養（皆浜分校）が閉校になるのはとても残念。

ロービジョンの方々 R2.10.9 14:30~16:00

○団体について

網膜色素変性症の当事者会をしている。見えないのではなく、見えにくい人の集まり。全盲の人に比べて、見えにくい自分たちの声は、ここ数十年の間無視され続けてきたと感じている。鳥取県でもやっと注目されるようになり、喜ぶと同時に今後の動きに期待している。このヒアリングも、やっと実現した。県内市町村でも初めてのことだと思うので、ぜひこの動きを継続して、広めてほしい。

鳥大にもロービジョン外来ができた。おそらく国立大学では全国初と思われる。このことももっとPRするべき。

○要望・困りごとについて

生まれつき見えない、または途中で全盲となった人に比べて、我々ロービジョン当事者はとても苦労する。

障がい者雇用率については、一時期騒がれたが、第三者が監視する体制を構築すべき。既に雇用しているのであれば、さらなる職場環境の改善に努力してほしい。

就労に関して、盲学校はあんま、針、灸の学習が中心。他の選択肢がないのは残念。全盲でも弁護士になった人もいる。もっと行政にも力を入れてほしい。

今後のことを考えると、就労支援だけでなく、情報機器使えるような支援も必要。

ロービジョン者が安全に歩道を歩くことができる町にしてほしい。今の米子市は点字ブロックもまだまだ十分でないし、自転車が交通ルールを守らず危険極まりない。また、市内の歩道に点在する植栽も、我々にとっては歩道を狭くするだけで邪魔でしかない。

障がい者のために歩道のバリアフリー化に力を入れたところ、高齢者も歩きやすくなり、介護保険受給率が大幅に下がった自治体の例もある。バリアフリーにもっと力を入れてほしい。

バリアフリーチェックは、見える人も一緒にすべき。色々な気づきがあるはず。

鳥取盲ろう者友の会 R2.10.21 14:00~15:30

○団体について

盲ろうとは、視覚・聴覚の両方に障がいのある人のこと。重複していることで制度の狭間となり支援が行き届かない面がある。

盲ろう当事者は全国に1万4千人ほどいると推定され、鳥取県内には平成27年度調

査で63人、米子市に11人が居住している。当会には、そのうち5人が利用登録されているが、残りの6人には手が届いていない状態。

○コロナの影響について

コロナ禍の影響は大きい。基本的に盲ろう者と相談員は、物理的に近くに寄り添った状態で通訳や介助を行うため、密は避けられない。密を避けるのであれば、会としての活動ができないことになる。

市役所でも職員にマスクされると口元が見えず、一生懸命自分に向かって伝えようとしてくれていることは分かるが、全く理解できない。もっと多くの職員が手話を習得してもらえると、我々は嬉しい。

最も欲しいのは集まって話をする場所。みんながつながりを求めている。

○地域とのつながり

自治会には入っているが、災害時の対応については今後の課題。どこに避難したらいいのか分からない。避難場所が分かっているが、距離が遠いため自分ひとりでは無理、と思う場合もある。

○災害対応について

防災無線が聞こえにくい。トリピーメールは届くのに時差があるし、基本的に県の発信する情報ばかりなので、市の情報は取得が難しい。ろう者は耳が不自由なため、台風や地震などの自然災害が分からない場合がある。

○困りごと

日常生活用具でないもので便利なものがたくさんあるが、いずれも高額なために手が出せない。生活がより便利になる機器は次々に新しいものが出てくる。障がい者にとって便利なもの、使いやすいものは、情報を得たら早いタイミングで助成が受けられるようにしてほしい。

就労に関して、盲ろう者が就くことが出来る仕事が少ない。ただ、具体的にどのような業種なら就労可能か、検討したことがないのも事実なので、自分たちにとっての今後の課題でもある。

緊急時のFAX送信について市からアンケートが届いたが、何が書いてあるのか全く理解できなかった。簡単な文章で、必要に応じてイラストなども入れてほしい。

盲ろう児へのアプローチという問題もある。将来の就労につなげるためにも、今後の課題である。

盲ろう者も高齢化が進んでいるが、介護保険のサービス利用が困難。最近、介護施設に盲ろう支援のサービスが入れることになった。事業者を理解してもらうことが必要なので、ぜひ市役所からも周知してほしい。

発達障がい家族ネット R2.11.24 13:00~15:00

○団体について

平成 26 年、発達障害事例検討会から発達障がい家族ネットに名称変更。毎月 1 回例会を開き、当事者のいる家族同士約 10 名ほどでお互いの状況や不安、悩みなどについて話し合っている。

○高齢化について

世間でよくいわれる 8050 問題→9060 問題→親が亡くなり、兄弟姉妹からの支援、という流れ。

家庭によっては、障がい当事者と家族の間に溝がある、というケースも多く、外部からのサポートを受けないと関係がうまくいかない場合もある。家族全体が高齢化しても、そうした家庭内での構図は変わらない。

○地域とのつながりについて

障がい当事者のなかには、一人で暮らし、就職している方もあるが、何か自分の思うようにいかないことがあったときなど、大声を出したり、パニック状態になる方もある。親類は離れて生活し、日中は仕事に就いておられるので、早急な対応ができないことも多い。近所の人にある程度様子を見てもらうようお願いできても、不穏状態（問題行動が起きている状態）が長く続くと、救急車を呼ばれたりすることもある。

○要望・困りごと

障がい当事者の家族が、一番つらい思いや疲れを抱えている。当事者と良い関係を築けないだけでなく、近所の人とトラブルになることもある。それを修復する人、方法が必要。家族全体への支援策が構築できないだろうか。

現行の福祉サービスはほとんど受けていない、という家庭が多い。理由は、気軽に利用できないから。障がいの特性から、ある程度の信頼関係が構築されてからでないと、利用は難しい。また、不穏状態にあるときでないと対応できない、というのはどうかとを感じる。予め予防や兆候などを見極めておくような、長期的な関係性を築いてもらいたい。

当事者と、それを支える周囲の人間の間には、信頼関係が必要。

今の福祉サービスは、時間をかけての信頼関係構築が想定されていない感じがする。行政の保健師も人数が少なく、今の体制ではこれ以上の手厚い支援は難しいと思う。

信頼関係を計画のなかの目標値などに設定することは難しいし、そもそも数値化することは非常に困難だと思うが、何とか目に見える形で設定してほしい。

家族にとって気軽に不安や悩み事を相談できる場所があるのが理想的。

鳥取県難聴者・中途失聴者協会 ファクシミリによる意見提出

高齢化に伴い、会話に不自由を感じている人が増えている。

会話がはっきり聞きとれないことから、家庭内で孤立する人も増えている。近所との会話も少なくなり、話がかみ合わないことから、認知症ではないかと勘違いされ、ますます孤立化していく傾向にある。

手話がさかんになるにつれて、聴覚障がいを持つ人＝手話ができる、との勘違いが生まれている。

手話を覚えて使いこなせる人はほとんどいない。何とか当人が覚えてもまわりが覚えられず、何の役にも立たないことがほとんど。

会話に不自由を感じていても、自分から言い出せず、引きこもり傾向になることが多い。

声を大きくすれば聞き取れると誤解している人がほとんどで、大変迷惑している。

言葉としてはっきり聞き取れなくなってくると、補聴器も役に立たず、会話は筆談しかない。

ほとんどの人は読み書きができるため筆談が有効だが、それが理解できない人が多く困っている。

近年の若い人は文章をまともに書けない人が多く、筆談をお願いしてもまともに書けず、どうもならないこともある。

そのため全国要約筆記問題研究会では筆談セミナーを開催しており、分かりやすい書き方を指導している。

聞きづらい人のために筆談に応じてもらえるようにしてほしいと思う。